

思いやりの連鎖があったから

山口県 末武中学校 1年 木下 弥鞠

私は最近、忘れられない経験をしました。その経験が私に、人の温かさと思いやりの心を教えてくれたのです。

ある日、朝から周防大島につりに行くという父に、部活や用事がなかった私はついていくことにしました。その日はセミが鳴き、太陽がじりじりと照りつける、まさに真夏の暑さでした。橋を車で渡り少しすると、山と海しかなく^{ひとけ}人気もないような場所に着きました。このような場所の方がよく魚がつれるのです。そこは景色がとてもよく、自然に満ちあふれた場所で気持ちがよかったです。

私は車から出て景色を見ていました。すると父がカギを車に入れたままドアを閉めてしまいました。その瞬間、カギがかかり、中に入れなくなってしまったのです。でもそのときはまだ、私はすぐにドアが開くだろう、もう少しで中に入れるだろうと軽く考えていました。しかし、いつまでたってもドアは開かず、しかもとんでもないことに、父はけい帯電話も財布も車の中に置いていたのです。私は途方に暮れました。

そこに、一人の若いつり人の男性がやってきました。父が思わず声をかけ事情を話すと、快く、

「手伝えることがあればなんでもしますよ。困ったときはお互いさまですから。」

と、電話を貸してくれました。さらに、必要になるかもと千円まで貸してくれたのです。とても感動しました。

電話を貸してもらおうと、父は母に連絡を取り、保険会社にかぎを開けてもらうため島に来てもらうよう頼みました。しかし困ったことに、今、私たちのいるところの住所がわからないので、車の業者の人はどこに行けばいいのかわからないし、母から父に電話をかけ直すこともできません。だから何度も電話を借りて話し、結局私たちは、道の駅まで歩いていき、そこから車の業者の人を案内するということになりました。

でも、道の駅までは思ったより遠く、暑さもあり、クタクタになりました。もう限界だと思った父は、ヒッチハイクをしようと言い出しました。もう歩けなくなり、気力もなかった私もそうするしかないと思いました。でも正直不安でした。運転している人にとっては、知らない人を乗せるのは危険だし、無視して通り過ぎた方が面倒ではないからです。心の中でそう思いながら待ちました。

するとおどろくことに、父が2、3回手を挙げると、声をかけてくれたおじいさんがいたのです。事情を説明すると笑顔で車に乗せてくれて、道の駅まで送ってくれました。それからは事がスムーズに進み、車もカギが開き、無事に家に帰ることができました。

私はこの経験を通して、思いやりの大切さを学びました。この日、人の温かさにふれ、私の心もほっこりとなったことを今でも覚えています。助けてくださった方々が一人でもいなかったら、私たちは帰ることができなかったと思います。だから私も、困っている人がいたら助け、笑顔にしていきたいです。小さなことでも相手の心にひびくと思うから。そして、温かい心を広げていきたいです。島の美しさとともに、この日受けた親切を、私はいつまでも忘れません。